

ひろば

Tokyo Summer Institute について 若手グループへ

久保 亮 五 (東大理)

(4月17日 受理)

物性研究 Vol.3 , No.6 456 頁に「国際夏の学校開催に対する危惧と題する一文が寄せられている。これとは別に、前号には Tokyo Summer Institute のお知らせとその趣旨の説明が載る筈で、(この趣旨は理論方面の研究室には別におくばりした。) 表明された危惧に対する私どもの答は、本質的にはそこに尽されているから、読者には御理解頂けたものと思う。

しかし、この短たい説明では不充分だという方々もあるので、ここに再びいくむか私どもの立場と気持を説明しようと思う。お断りしておきたいが、これは非難に対する反駁文ではない。立場の相違、基本的な哲学の相違がある場合相手を説伏せることは困難であるし、ましてや拙ない文章で説得することなどはできない。また烟のように消える言葉では言えても、記録に残すべきではない物事もある。無意味な形容詞を投げあつたり、揚足を取るようなことは物理学者の間にあつてはならないと思う。われわれは手を携えて科学の研究の苦難をきり拓こうとしている同志なのである。

その意味で、危惧として表明されている批判は有難く受けた。summer school に対する関心が高まり、将来理想とする形でこういうものが開れるようになれば、私どもの意図が達せられるからである。若手グループからは未だ何を理想とするのか、示されてはいないが、これまでに話しあつたところでは理想そのものに本質的な相違はなく、その実現への過程について、私どもと意見を異にするようである。その意見の相違は、立場の相違であると思う。

ここに最も重要となるのは、最小限、異なる立場の存在を認めあい、その上で共通の目的のために助け合う、という態度である。これは極めて重要なポイントで、これが否定されれば、科学者の協力は成立たない。物理学会も、各種の委員会などによる協力活動も、国際的な科学者の協力も潰え去つてしまう。

ひろば

各人の政治的、思想的立場の表明は自由であつても、それを衝突させてはならないのである。人間の進歩の歴史は intolerance に対する戦いであつた。他人種に対する憎しめ、異教徒の圧迫、政治的思想の圧殺、科学は自然の真理を求めるが故に。そのような理不尽に対する戦いの燈であり得た。そして自然科学は思想的にも社会科学の母胎となり得たのである。

「危惧」の第一点は、外国からの参加者に対する旅費がアジア財団によつてまかなわれることについて、アジア財団が政治的意図をもつ財団であり、そのための制約を受けるであろうという推測である。財団の事業報告等の文章にはアジア財団は、非政治的、非宗教的団体であり、カリフォルニア州の法律にもとづいて設立された私的財団であると記されていて、これまでも日本と欧米の間の科学交流のために援助を行なつてきた。私どもはその裏に何があるか、とはさぐりはしなかつたが、今後もさぐろうとは思わない。その必要もないしそのような探索は少くも物理学者として私たちの活動ではないと思うからである。したがつてこの Summer Institute は非政治的、非宗教的団体であるアジア財団から、外人参加者への旅費支出という形で援助を受けている。

私どもが約束されているところでは、ヒモというものは無い。Summer Institute に参加する人々の国籍について注文をうけたこともない。実際、旅費援助は欧州からの参加者に対しても行なわれる。

この第一点はさらに、財団の援助が打切られれば、この計画は不可能になるからいけない、というふうにふえんされている。これはアジア財団の性格とは別な話で、日本の中の何々科学振興財団、あるいは湯川財団や仁科財団の援助を受けた場合にも、また政府の援助が仮に得られた場合にも同じことであつて財源がなければ同じ形ではできないことはもとより明かである。もし、このような形の交流が科学の発展のために、また国境をこえた科学者の連携のためにもよいものである。ぜひつづけようというのであれば、新しい財源をさがし、たとえ限られた条件のもとにでも努力してよい summer institute をつくり出して行こうではないか。私どもは微力で、将来どれだけのことができる、と約束することはできない。ただ同じ学問の道を進む皆さんの援助をお願いするだけである。

「危惧」の第二点は、この計画が private なものとして進められ、物理学

会委員会や物性小委員会などの公的機関で検討されたことがないが、このような重要な企画は研究者の間で充分討議されるべき問題である、ということである。私は夏の学校自体が、日本の理論物理の進路を左右するほどの重要性をもつとは思わない。科学の進歩のために、われわれは数多くの努力を積重ねてゆかなければならない。これもその煉瓦の一つであり、決してこれが日本の物理を左右しようなどと思いつたことはない。理論物理を強く成長させるためのささやかな努力にすぎないのである。しかし、これが多くの人々の関心を惹き私たちの播く種子が真直ぐに伸びることは私どもの願いであり、その意味で若手グループの批判と関心を多とする。

private という言葉の意味については人々によつて解釈の相違があろう。われわれの行動はいずれも社会的であるが、それにどれだけの公共性を賦與し公共的に規制すべきかという限界線をくつきりひくことはむづかしい。その境界を混成的にすることはいつも必要である。社会主義体制のもとで考えられる最善と、日本の現体制下での最善とちがうのは当然である。現在の境界条件のもとでは、この種の企画を公的機関で直ちに実行することは不可能である。学術会議は国際会議を主催するが、その能力はきわめて限定され、物理学関係の会議、たとえば来年の半導体、その後の原子核低エネルギーなどもその枠の外に追出される実情にあつて、summer institute のような informal な会は問題にならない。物理学会も、このようなものを主催する能力はないし、未だその機運にない。基研や物性研のような共同利用研究所がその事業として取上げることは、一つの望ましい方向であるが、研究費の実情から見ても直ちに実現することはむづかしい。そのほか、こちらだけの希望はいくらでも述べられるが、どれとつても実現が困難をきわめることは過去何年か、いやというほど思い知らされたことである。

それらの困難を越えて、この実現の方法の可能性をさぐり始めたのは昨年秋以来であるが、アジア財団にしてもその確約を得たのはわずかに2月末のことであつた。寄附の免税措置の見通しもやつと最近のことである。しかし一方、外国からの講師への交渉や、会場の約束は冬のうちにしなければ手遅れになってしまう。その交渉を進めながらも確実な確実な基礎が得られるかどうか、甚だ心配だつたのである。その心配は未だ終つていない。

ひろば

情勢がかなりはつきりするまでは、あまり大声で皆さんにお話しする元気がなかつたのも一つであるが、それでも、物理学会委員会には、その協賛をお願いするという意味で問題を提起したし、また物性研の共同利用運営委員会は、これと連結した研究会の開催を提案するという形で出しているのである。これらは「公的機関」で検討するというプロセスの一つ一つであつたと私は思っている。

基研や物性研での研究会の企画も、物理学会での討論会などの企画も多くは個人の発意にもとづく。それらは研究部会とか、委員会で審議されるが、それはたとえば基研の共同利用の研究費を使うからである。その研究費に関係ないもの、場所に関係ないものも必らずそこで審議され同意を得なければならないということはない。一方、研究計画には、共同であれ、個人であれ、周囲の有効な助言が望ましいことはいうまでもない。しかしそれが自由な創意を窒息させては困るのである。こんなわかりきったことを言う理由は、たとえば、研究計画は研究者会議できめなければならない、といった考えに対する理解のしかたは、大へんむづかしい問題を含んでいるからである。将来の日本の科学を担う若手の方々には少くもそのむづかしさを知っておいてもらいたいからである。何でもそうしなければいけないとは誰もいつていない、といわれるかもしれない。しかし、政府機関や会社研究所なら研究計画が研究者会議ではない、別なもので決定される、としても或は当然と思うだろう。大学には研究の自由はあるというが、個々の研究者にどこまでの自由があるのか、また現実はその自由を保証するのか、むづかしいところである。研究者会議が研究計画を統制するのは非研究者による統制よりはよいだろうが、それとて神様ではない。

私は研究者会議のようなもので研究計画をきめることがいけないといっているのではなく、それだけではいけない、別な途を残すことが必要だといっているのである。どんな体制下でも・統制された研究活動と自由な個人的活動とが相補うことが必要なのである。同様、私的な資格における個人、またはグループが「公的機関」と独立に活動する余地を認めることは基本的な重要性をもっている。

かつての物性論研究の創刊も、戦後のその再刊も、またこの物性研究の発行

も private なものである。Progress も基研ができる前、private に出発した。物理学に大きな影響を与えてきたこれらの活動を private だからいけない、というべきであろうか。そういう活動も少くも最初は個人の private の活動として始まる。学会もそうである。そういうものがだんだん成長して組織化されてゆく。private な活動は、禁圧すべきものではなくて、皆で育て伸ばしてゆくべきものである。批判と助言はその最も大切な肥料である。

私たちの企画した summer institute も、上にいったような先例と同じように、今後成長してゆくことをこい願っている。もつとしつかりした、もつと理想的な形にだんだんにもつてゆきたい。いろんな形が考えられよう。基研や物性研あるいはどこかの大学が、政府予算を得て行なう定常的事業、物理学会が実力をたくわえてやる、物理学関係の既存の財団、あるいは新しい財団の事業、どれであつてもよい。適切な組織をつくり、研究者の自主的な判断で、理論物理に必ずしも限らず、理論と実験の密接な連携ある分野を含め、欧米のみならずアジア諸国からの活潑な人々を迎えて、インフォーマルな空気の中に、いわゆる国際会議とはまたちがつた研究交流の場となる summer institute、それは国境や政治的信条を越えた科学者としての相互の理解を通じ、共通の意識を生み、やがてこの世界の対立を消し去ることにも、科学者として貢献するであろう。

目ざすところは、私たちも若手の人々も同じであると信ずる。「危惧」としての批判は有難く頂戴し、今後さらに建設的な御意見を期待したい。私は表明されたような危惧はないと思っているが、「将来」については皆さんの御協力を得なければどうにもならない。あんまり先を急がずに、じつくり進むより方法はないので、足を地につけて応援して頂きたい。 (1965-4-10)